



国語の授業 ～まいごのかぎ～

異例の早さの梅雨明け。このまま確定すれば、観測史上最も早い梅雨明けとなると同時に、これまで近畿地方の最短であった梅雨の期間17日を更新し、過去最も短い14日間の梅雨となります。真夏並みの連日の暑さの中、熱中症にはくれぐれも気をつけながら、残りわずかとなった1学期ですが、1日1日を大切に過ごしていきたいと思います。

さて、本校では「言語活動を通して学び合う授業づくり」をテーマに研究を進めています。6月には3年生のクラスで国語の授業研究会を行いました。「まいごのかぎ」という物語の学習で、子どもたちは教材を読み、学習計画にそって課題の解決に意欲的に取り組んでいました。この「まいごのかぎ」というお話は、ファンタジー作品で、主人公の「りいこ」が出会う様々な出来事とおして、自分自身を肯定的に捉えることができるようになる姿が描かれています。

<あらすじ>

余計なことをしてしまったと落ち込みながら歩くりいこがひろった鍵は、鍵穴に入れると不思議なことが起こる鍵でした。例えば、桜の木の根元に見つけた鍵穴は、鍵を入れるとどんぐりの実が落ちてきました。また、公園のベンチにある鍵穴に入れると、動くことのないベンチが動き出します。他にもあじの干物が空を飛んだり、時間通り走るバスがダンスを始めたりします。そこでりいこは気づくのです。もしかするとみんな自分たちがやってみたかったことをしているのだと、心の自由があったいいのだと。するといつの間にか鍵はなくなっていました。

子どもたちは、「なぜ、りいこのもとに鍵があらわれ、なくなってしまったのか」自分の考えをまとめたり、グループで話し合ったりすることで、学びを深めていました。そんな子どもたちの生き生きとした姿に感銘を受けるとともに、物語から作者の思いが強く感じられました。この物語の作者である齋藤倫さんは、「成長という旅の中で、答えの鍵穴を見つけることだけが目的ではなく、探しながら、まいごになることも楽しんでいいんだと気づいてもらえたら、これ以上のことはありません」と作品に言葉を添えられています。未来を生きる子どもたちには、たくさんの正解があり、失敗や回り道も同じように正解です。結果を恐れず、興味をもったり、チャレンジしてみたりしながら、豊かな人生を歩んでほしいと願います。そしていつの日か、またこの物語に出会い「まいごのかぎ」という題名の意味を改めて考えてほしいです。

亀岡市立詳徳小学校長 平井 真理子

なかよし班開きがありました！〔6月7日(火)〕

「1～6年生の異年齢グループを作って詳徳小学校のみんなが仲良くなろう！」ということをめあてに、なかよし班活動が始まりました。6年生がリーダーとなり、会の進め方や自己紹介の仕方などを考え、下級生に優しく声をかけていました。自己紹介の後には、「いすとりゲーム」や「フルーツバスケット」など、グループのみんな遊びを楽しみました。7月には、「なかよし班そうじ」にも取り組みます。学年を超えたつながりが生まれています。

